

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520672

研究課題名(和文) 前近代日本における歴史的景観形成についての災害文化論的アプローチ

研究課題名(英文) Approach of the disaster culture to forming the historical landscape in pre-modern Japan

研究代表者

木村 修二 (KIMURA, SCHUJI)

神戸大学・人文学研究科・研究員

研究者番号：10419476

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、前近代日本における歴史的景観・地域秩序の形成に、自然災害が与えた影響を通時的に検討した。具体的には、水田農業の支柱である灌漑用水の地域的利用に注目し、分水慣行の変容に水害や旱害などの自然災害が深く関わり、景観や地域秩序の形成にも大きな影響を与えていたことを明らかにした。災害文化の蓄積が地域社会で進んできたことを、地域住民の努力による災害記念碑の保全の現状を通して確認した。災害や治水に関する伝承や伝説が、地域的災害の記憶や現実の対応を反映したものであることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, we investigated the effects of natural disasters had on the formation of the historic landscape and regional order in pre-modern Japan. Specifically, We clarified that by focusing on regional use of irrigation water is a prerequisite for paddy agriculture, natural disasters deeply involved in the transformation of water diversion practices, and had a major impact on the formation of the regional order and landscape. It was confirmed through the current state of conservation of disaster monument by the efforts of local residents, that the accumulation of disaster culture has progressed in the community. It was found that this is what legends and lore related to flood control and disaster, reflecting the practical correspond and the memory of regional disaster.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：歴史的景観形成 灌漑水利 災害文化 地域秩序 前近代日本 分水 災害モニュメント 兵庫県

1. 研究開始当初の背景

研究代表者木村の専門分野である歴史学において歴史的景観の問題は、古代から近世までの各時代において視角を異にしながらも重要な課題として論じられてきていた。なかでも水本邦彦による近世の「社会景観」研究は、地域における過去の景観の復元を、地方史料などを駆使して行なうとともに、それが地域社会の形成へも影響していることを論じていた点は、本研究とのかかわりにおいても参照すべき論点を多く含んでいた(『絵図と景観の近世』(校倉書房、2002年)。また災害文化論的視角においては、『災害文化史の研究』を著した笹本正治、『日本災害史』などを著した北原糸子の諸研究が注目された。笹本は、災害の頻発する地域においては災害への対応を習慣や伝承で蓄積される独自の災害文化が存在することを論じていたが、事例が東日本中心であり西日本の地域性から独自の災害文化を論じる余地はこの段階でまだ残されていた。また北原は近世を中心とする災害史の掘り起こしを行なうとともに、歴史民俗学的視角から民衆の災害意識の面へも迫っていたが、どちらかといえば都市問題として捉える傾向もあり、水田耕作を中心とする地域社会への視線は課題として残されていた。また歴史的な灌漑水利の問題については、喜多村俊夫の『日本灌漑水利慣行の研究』(岩波書店、1950年)の先駆的かつ極めて網羅的な研究があるが、自治体史において水利をめぐる叙述が多くなされることはあっても、一般社会の普遍的問題として追求する視角において喜多村の水準を超える様な研究は歴史学の分野では現われておらず、それは現時点でも変わらない。むしろ地理学の中にもみるべきものが多く、野崎清孝『村落社会の地域構造』(海青社、1988年)などは、水利問題を地域社会形成の重要な要素として捉え一部歴史地理学的方法も用いながら論じている点で、本研究にも大きく関わるものだった。

2. 研究の目的

(1)本研究の全体構想は、前近代の日本社会における歴史的景観の形成に、水害や旱害などのような様々な自然災害が与えた影響を通時代的に検討することにあつた。その際、以下の点を具体的な目的として研究を進めてきた。

洪水や旱害といった様々な災害の影響が、地域の歴史的景観・地域秩序形成を独特なものたらしめるという視点を「災害文化論的アプローチ」とよび、その理論的な方法論の確立をめざす。具体的な素材として、近代の工業化以前の日本社会における基盤的産業であり、なおかつ自然災害の影響を否が応でも蒙らざるをえなかった水田農業を取りあげ、それが地域の歴史的景観形成にきわめて大きく関わっているという認識のもと、その支柱ともいべき灌漑用水の地域的利用に特に注目することで、景観形成に深く関わる地域秩

序の形成にまで影響が及んでいることを明らかにする。

(2)上記の目的を有効に達成するために、本研究では兵庫県を中心とする近畿エリアを対象フィールドに定めてきた。この地域を対象フィールドとした理由は以下の通りである。兵庫県域は、北は日本海、南は瀬戸内海・太平洋にそれぞれ面し、山間部の豪雪地帯まで擁するなどまことに多様な風土的地域性を備えた地域であり、また武庫川・加古川・市川・円山川などのような比較的大規模な流域圏をもつ河川も存在するなど、多様な自然条件がその地域独特の歴史的景観形成に深く関わっているのではないかという課題を比較検討するうえでも、まことに豊富な事例を得ることができること。兵庫県域を含む近畿エリアは、前近代においては農業の先進地域と捉えられ、それを支える灌漑水利設備もかなり早い段階から整備されてきている一方、水害をはじめとする災害もあまねく被ってきており、各地で独特の災害文化を形成してきていると考えられること。兵庫県をはじめとする近畿エリアでは、早くから自治体史の編さんが進み、文献資料の調査もかなり行き届いているため、上記のような課題に迫るための資料を収集するうえでもまことに好条件を備えたエリアであること。これらのことから歴史的景観形成についての災害文化論的アプローチを行うためのフィールドとして極めて有効な地域であると考えた。

3. 研究の方法

本研究では、兵庫県域を中心とする近畿エリアにおける地域史料の研究・分析を通して、地域の歴史的景観の形成にその地域独自の災害文化が深く関わっていることについて一定の解答を得ることを最大の目標に据えてきた。具体的には、水田農耕の基礎である灌漑水利をめぐる争いである水論が、水害や旱害を契機に発生していることを各地域の事例から確認し、とりわけ井関や用水路、分水施設など灌漑水利に関わる諸設備がそうした水論の解決の結果、構築・整備され、地域独自の景観の構成要素として位置づいてゆくことを明らかにすることである。

以上のような研究目的を達成するための具体的な研究方法は以下の通りである。

(1)まず初年度には、メインテーマである地域の歴史的景観や地域秩序の概念的な理解や、サブテーマである地域の災害文化の諸相を把握するための準備期間にあてた。そのための準備作業として、第一に本研究を遂行する上での基盤となる歴史的景観研究、災害文化論研究、灌漑水利を中心とする農業技術研究など、各分野の学術的達成を集約・総合し、そのために必要な文献を収集・購入した。また第二

に、具体的な研究素材とするための地域史料（古文書等）の収集を、各地の自治体史を初めとする郷土史的文献の購入や各地域に遺されている原史料の現地調査・収集活動を通して行った。

(2)具体的な調査フィールドとして、近世に水害が多発した兵庫県南部の神戸市域を中心とする六甲山南麓地帯（西摂地域）日本海へ流入する由良川水系と瀬戸内海へ流入する加古川水系とが交錯する兵庫県東部および京都府西部にまたがる丹波地域（とりわけ極めて低い分水嶺によって両河川流域の特色が混合して現れている兵庫県丹波市域）(3)兵庫県北部円山川水系に属する但馬地域（とりわけ近世に洪水が多発した円山川支流出石川上流域にあたる豊岡市旧但東町域）を指定し、集中的に史料収集にあたった。現地での史料収集に当たっては、神戸市教委や丹波市教委、豊岡市教委のそれぞれの文化財セクション、および地域の歴史研究団体の協力を得ながら効率的に調査を進めた。

4. 研究成果

(1)近世における分水争論と地域的水利秩序の形成（木村修二）

古来、水稲耕作において欠かせない灌漑用水をめぐる、水田を抱える地域ではしばしば争論が発生している。その内容は、地形などの自然環境などを反映し多岐にわたる。なかでも一本の用水路からの分水をめぐる争う水論は、比較的短くかつ狭い河川水系や密度の濃い村落分布という特色を持つこの列島では、必然ともいえるほど多くの場所で、かつ頻繁に発生している。

従来、前近代の地域的水利慣行をめぐる研究や自治体史などの歴史叙述では、こうした水論に関する史料を素材に論じられることが多い。それは、史料の残存の仕方に規定されることによると見られるが、争論の過程で作成された訴状などの史料には、それまでの当該地域における水利慣行に、その既存秩序を突き崩すかのように発生した新たな事態がぶつかってきた状況が浮き彫りにされることが多く、結果的に領主権力による裁許や仲裁者の介在を含む当事者間での和談（内済）によって、改めて従来の慣行が再確認されたり、あるいは新規の慣行が産み出されることも見られる。その意味で、こうした水論史料が当時の水利慣行の実態を伺う上で重要なものであるとみることが疑問の余地はないが、そうした慣行が安定的に推移したと考えることは、いささか楽観的にすぎよう。やはり、非常時ともいえる水論の前後における慣行のあり方は、その時点でのあり方にすぎないものなのだと考えておく必要がある。しかし、貴重な情報であることには変わりはない。

では、慣行の日常的なあり方を窺うにはど

うすればよいのかといえば、やはりそれを窺うにふさわしい史料の存在、連続する時間の推移とともに当事者によって書き継がれる記録が望まれるのだが、それは奇跡を待つに等しい。したがってたまたま発生した水論時に輪切りのように記録された慣行情報が、全く同じ内容ではありえないにしろ、歴史の経過のなかで幾度か経験したような地域を選べば、それらの内容を比較してその変化を窺うという方法が現実的なのではないか。

本研究では、そうした意図を実現するために、近世中期以来明治初年にいたるまでたびたび水論が発生している摂津国八部郡奥平野村（現神戸市兵庫区平野地区）を中心とする地域を対象にとりあげ、それぞれの争論内容とそれにより窺える水利慣行のビフォー&アフターをまとめ、時期の異なる慣行内容を比較検討して、当該地域における水利秩序の本質を捉えることを試みた。

(2)佐治川流域の災害文化～神楽川板橋碑を中心に（松下正和）

本科研の全体構想として、「前近代の日本社会における歴史的景観・地域秩序の形成に、水害や旱害などのような様々な自然災害が与えた影響を通時代的に検討すること」をあげている。また、「水害や旱害といった災害の影響が、地域の歴史的景観・秩序形成を独特なものたらしめるという視点を『災害文化論的アプローチ』とよび、その理論的な方法論の確立をめざす」ことを目的の一つとして、現地調査と研究活動を進めてきた。松下は、本プロジェクトの研究分担者として、丹波市教育委員会や現地の住民団体などと連携しながら、丹波市（旧丹波国氷上郡）をフィールドの一つとして、災害史研究をおこなってきた。

丹波市域（旧氷上郡）を指定した主な理由は、日本海へ流入する由良川水系と瀬戸内海へ流入する加古川水系とが交錯するユニークな地域である。とりわけ極めて低い分水嶺によって両河川流域の特色が混合して現れると考えられ、具体的には、加古川・佐治川（旧神楽川）流域における現今の災害対応のあり方を、現在にまで地元により大切に保管・管理されてきた災害記念碑をとりまく歴史から検討した。また、現地の人々から聞き取り調査を行うことにより、特色ある災害文化の存在を明らかにしてみたい。そのことを通じて、地域住民の災害観が当該地域の基幹産業である農業を取り巻く歴史的環境や社会的秩序にどのように影響しているのかを検証する本プロジェクトに資することを期す。

過去の災害経験が地域に蓄積し、その地域特有の知恵や伝統が形成・継承され、その地区の人々に自然への理解や防災への心構えなどが定着していく。それは一般に「災害文化」

とよばれている。佐治川流域に架かる神楽橋の石碑が地区の方々の努力により大切に保存されていることも、災害文化の一つといえるのではないかと。碑文の最後にある、「この橋が落ちず、幾代にも恵みを残してほしい」という願いは今も昔も同じであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

- (1) 松下 正和、播磨の災害記念碑 安政南海地震碑・寛延二年大洪水碑、翰苑、査読無、1、2014、175 203
- (2) 松下 正和、2009年台風9号被災資料の保全と活用 佐用郡地域史研究会・佐用町教育委員会との連携、災害・復興と資料、査読無、2、2013、27 38
- (3) 木村 修二、江戸時代における住吉川の大洪水、住吉歴史資料館だより、査読無、6、2013、8 11
- (4) 松下 正和、播磨国風土記の地名が語る古代の神崎郡、福崎町文化、査読無、29、2013、2 8
- (5) 松下 正和、東求女塚古墳と菟原処女伝承(2)、住吉歴史資料館だより、査読無、第4号、2012、9 12
- (6) 松下 正和、貞観10年の播磨国大地震、いひほ研究、査読無、第4号、2012、4 17
- (7) 松下 正和、災害文化の継承に向けて、歴史科学、査読有、204号、2011、14 25
- (8) 松下 正和、被災史料の救出と地域遺産風水害への対応を中心に、歴史と神戸、査読無、282、2010、41 48
- (9) 木村 修二、近世における大規模河川井堰の構造と変容、LINK【地域・大学・文化】、査読有、Vol.1、2009、64 83

[学会発表](計35件)

- (1) 松下 正和、津波記念碑を活かした防災の取り組み、和歌山県立博物館現地学習会「歴史から学ぶ防災 印南町をフィールドにして」、2014/3/16、和歌山県日高郡印南町公民館
- (2) 木村 修二、白浜町富田地区に残る津波警告板、和歌山県立博物館現地学習会「歴史から学ぶ防災 印南町をフィールドにして」、2014/3/16、和歌山県日高郡印南町公民館
- (3) 松下 正和、播磨の災害記念碑 安政南海地震碑・寛延二年洪水碑、第5回前近代社会災害文化研究会、2013/12/28、神戸大学
- (4) 木村 修二、「合」とは何か 分水石の使用をめぐって、第5回前近代社会災害文化研究会、2013/12/28、神戸大学
- (5) 井上舞、伴善男播磨流罪譚と貞観十年播磨地震、第5回前近代社会災害文化研究会、2013/12/28、神戸大学
- (6) 森元 純一、災害と伝説を巡る一考察、第

- 5回前近代社会災害文化研究会、2013/12/28、神戸大学
- (7) 河野 未央、寛永飢饉と兵庫津、第5回前近代社会災害文化研究会、2013/12/28、神戸大学
- (8) 木村 修二、江戸時代の香良村字向島をめぐって、香良講演会(招待講演)、2013/11/24、丹波市氷上町香良公民館
- (9) 木村 修二、古文書からみえてくる丹波の歴史 氷上町香良を中心に、氷上町郷土史研究会(招待講演)、2013/8/10、丹波市氷上住民センター
- (10) 松下 正和、古代播磨の災害史 国家・地域社会の対応を中心に、佐用郡地域史研究会、2013/6/22、佐用町教育委員会
- (11) 木村 修二、古文書からみた金屋の江戸時代 『金屋村記録帳』を中心に、金屋総代文書現場説明会(招待講演)、2013/4/21、丹波市山南町金屋公民館
- (12) 松下 正和、古代水辺の環境史 - 武庫郡の川・水門・浦 -、宮水学園ふるさと講座、2013/1/6、西宮市立大学交流センター
- (13) 森元 純一、近世における山野の荒廃、第4回前近代社会災害文化研究会、2012/12/28、神戸大学
- (14) 河野 未央、『観聞記』から見た龍野・播磨の災害、第4回前近代社会災害文化研究会、2012/12/28、神戸大学
- (15) 松下 正和、古代の鳴動、第4回前近代社会災害文化研究会、2012/12/28、神戸大学
- (16) 木村 修二、「災害文化」論の可能性(序論) 笹本正治『災害文化史の研究』に学ぶ、第4回前近代社会災害文化研究会、2012/12/28、神戸大学
- (17) 木村 修二、古文書から見えてくる江戸時代の丹波 葛野庄下村を中心に、氷上郷土史研究会、2012/8/25、丹波市氷上住民センター
- (18) 松下 正和、丹波地域と災害 石碑からみた水害の歴史、平成24年度丹波OB大学講座、2012/7/11、丹波の森公苑
- (19) 松下 正和、地域に残された歴史資料の保全活動と活用事例 歴史に学ぶ防災・減災、加古川市両荘寿大学、2012/6/27、両荘公民館
- (20) 木村 修二、近世領主の災害見分と対応 史料紹介をかねて、第3回前近代社会災害文化研究会、2011/12/29、神戸大学
- (21) 中岡 宏美、吹田地域における災害とその関連遺構について、第3回前近代社会災害文化研究会、2011/12/29、神戸大学
- (22) 河野 未央、災害復興と新田経営 尼崎沿海部・中浜新田の事例から、第3回前近代社会災害文化研究会、2011/12/29、神戸大学
- (23) 松下 正和、「前近代日本における歴史的景観形成についての災害文化論的アプローチ」研究会～平成23年度の活動報告、第3回前近代社会災害文化研究会、2011/12/29、神戸大学

- (24) 森元 純一、治水をめぐる思想・思考 備前国邑久郡を中心に、第3回前近代社会災害文化研究会、2011/12/29、神戸大学
- (25) 河野 未央・松下 正和・中岡 宏美、大規模自然災害時の歴史資料ネットワークの資料保全活動について、保存科学研究集会2011、2011/12/21、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂
- (26) 木村 修二、描かれた村の景観 山南の村絵図を読み解く、丹波連続講座2011年度第3回、2011/9/17、丹波市山南住民センター
- (27) 松下 正和、2004年京都府北部水害時の歴史資料保全とその課題、日本史研究会4月例会、2011/4/23、機関誌会館
- (28) 木村 修二、分水慣行と歴史的景観形成、第2回前近代社会災害文化研究会、2010/12/29、神戸大学
- (29) 松下 正和、東求女塚古墳と菟原処女伝承、第2回前近代社会災害文化研究会、2010/12/29、神戸大学
- (30) 森元 純一、用水をめぐる記憶 田原用水を題材として、第2回前近代社会災害文化研究会、2010/12/29、神戸大学
- (31) 松下 正和、大規模自然災害時における被災史料保全活動の現状と課題、日本史研究会4月例会「地域歴史資料と歴史研究」、2010/4/17、機関誌会館5階大会議室
- (32) 高橋 清吾、近世奈良盆地と武庫川流域の灌漑水利と水論、第1回前近代社会災害文化研究会、2009/12/29、神戸大学
- (33) 森元 純一、河岸段丘がもたらす空間把握、第1回前近代社会災害文化研究会、2009/12/29、神戸大学
- (34) 松下 正和、古代の猪名川・武庫川をめぐる災害と開発 荒ぶる女神と河川氾濫伝承、第1回前近代社会災害文化研究会、2009/12/29、神戸大学
- (35) 木村 修二、「合石」論、第1回前近代社会災害文化研究会、2009/12/29、神戸大学
- 〔図書〕(計6件)
- (1) 松下 正和・河野 未央他、東京大学出版会、奥村弘編『歴史文化を大災害から守る地域歴史資料学の構築』、2014、462
- (2) 木村 修二他、明石市立文化博物館、『明石藩の世界 文書と絵画』、2013、83
- (3) 木村 修二・松下 正和・河野 未央他、岩田書院、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『地域歴史遺産の可能性』、2013、493
- (4) 松下 正和、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会事務局、『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成23年度活動報告書』、2012、314
- (5) 河野 未央・松下 正和、山本共有財産管理組合、『江戸時代の古絵図にみる山本村の歴史』、2012、52
- (6) 木村 修二・松下 正和・河野 未央他、丹波市教育委員会、『丹波市ブックレット 丹

波の歴史文化を探る』、2011、90

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 修二 (KIMURA, Shuji)
神戸大学・大学院人文学研究科・学術研究員
研究者番号：30420297

(2) 研究分担者

松下 正和 (MSTSUSHITA, Masakazu)
近大姫路大学・教育学部・講師
研究者番号：70379329

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

森元 純一 (MORIMOTO, Junichi)
岡山県和気町教育委員会・職員

河野 未央 (KONO, Mio)
尼崎市立地域研究資料館・職員

井上 舞 (INOUE, Mai)
神戸大学・大学院人文学研究科・学術研究員

中岡 宏美 (NAKAOKA, Hiromi)
吹田市立博物館・職員(2011年度当時)

高橋 清吾 (TAKAHASHI, Seigo)
神戸大学・大学院人文学研究科・院生(2009年度当時)